## 新しい街おこしの広がりを

大橋元明

NPO法人
シニアSOHO小金井
相談役（前代表理事）

この度の演劇上演は多くの方々が参加した協働とご支援の賜です。現代座、シニアSOHO小金井、川崎平右衛門プロジェクト、上演サポーター、およびご来場の皆様に感謝申し上げます。

江戸時代中期、宝永大地震、富士山大噴火など相次ぐ自然災害と放漫財政によって破綻寸前だった幕藩体制の立て直しに将軍徳川吉宗は享保の改革を断行します。その重要施策の一つが新田開発でした。大岡越前守忠相は御栗林の縁で知った川崎平右衛門に不毛の台地だった武蔵野の新田開発に当たらせました。平右衛門は現在の小金井市と埼玉県鶴ヶ島市に陣屋を構え、独創的手法と農民との共同により新田開発を成功させました。その後、美濃国の治水に成功し、石見銀山を再興しますが、小金井時代の経験が生かされています。玉川上水の堤に植えた桜は名勝小金井桜として今に続いています。

しかし、小金井の桜と栗を知っていても創始者について知らない人が多く、平右衛門が活躍したご当地・小金井市での無関心ぶりを残念に思い、啓蒙活動をしておりました。平右衛門の活躍は大岡忠相との出会いから始まり、平右衛門の知恵と多くの人々の支え合いが事業を成功に導きました。平右衛門を知ってもらうには人々の生き様を描く演劇が最適と思っておりました。

二〇一〇年三月、NPO現代座の木下美智子さんに平右衛門の演劇作りを打診し、四月に「川崎平右衛門プロジェクト」がスタートしました。平右衛門と郷土史の学習や史蹟の実地見聞などを積み重ねた成果が現代座によって演劇として結実し、二〇一一年の第三小学校六〇周年記念・朗読劇の上演、そしてこの度の演劇上演の運びとなりました。木村快さんのシナリオ作りの洞察力と情熱、皆様の演劇に対する前向きな取り組みに敬服を表します。

現在の東日本大震災と原発事故、財政難は当時の状況に似ており、平右衛門に学ぶところがあります。今回の上演が平右衛門への関心の広がり、さらに平右衛門を活かした地域興しに発展することを願っております。

＊公演当日プログラムの「挨拶」より。

## 協同してみんなが豊かになる

西東京市　蔦谷栄一

長く農協関係の仕事をされ、農業評論家としても知られる。サポーターの一員として奮闘された。

「武蔵野の歌が聞こえる」では、登場する役者たちの個性的で納得性の高い演技、そしてシンプルであるだけに美しくかつ力強く響く歌声・合唱に感嘆させられたが、同時に強力なメッセージを発している脚本の持つパワーが印象的であった。

本劇は川崎平右衛門が農民の立場で新田復興を図り、農民自身の助け合い精神を引き出すことによって、協同の村をつくりあげていくストーリーを描いているが、「今回の作品制作の意図は川崎平右衛門の伝記ではなく、不毛の大地と言われた武蔵野台に、なぜ新しい村々が誕生したのかを探ること」にあるとしている。その心は、政策に当たる側は農民の立場を十分に理解していることが必要であり、このためには農民の目線をしっかりと獲得していること。そして農民自らが内発的に取り組んでいくことが肝心であり、一人一人では小さな力しかない農民が自ら内発的に取り組んでいくには相互扶助、協同していくことが欠かせない、というところにある。震災から復興し「みんなが豊かになる」ために、特に協同性が大事だということは、実はまっとうに生きている多くの人の心の中にある思いであるからこそ深く胸打つものがあったように思う。

今、安倍政権がすすめつつあるアベノミクスとTPPへの執着は、経済成長と「選択と集中」による格差拡大を前提とする真逆なものであって、自分だけは豊かになっても「みんなが豊かになる」ことはない。そこには「地方創生」という言葉遊びがあるだけで現場目線は皆無であり、農協批判とその改革意見の中身は協同組織の壊滅を狙っているとしか考えられない。それだけに震災からの復興は難しく日本の再生はかなわないことになる。しかし本劇は地域という相対的に小さな、限られた舞台であれば、皆が当事者となって地域とかかわりをもち、しかるべきリーダーを確保し協同性を発揮していくことをつうじて、希望を手繰り寄せていくことは可能であることをも示唆しているように受けとめた。

なお、本劇は基本80席という限られた空間のなかでの肉声によることにこだわったものであったが、それであるがゆえにメッセージが直截に伝わり説得性を持つことを実感するという貴重な経験を得た。あらためて空間というものが劇に生命を吹き込むにあたってきわめて大きな要素であることを実感し、正直驚かされもした。